

# 将来の日本語

## — 形態変化 —

多和田 眞一郎

### はじめに

言語は変化する。過去・現在・将来（未来）にわたって変化する。ところが、実際に「変化」を問題にする場合、過去と現在とを対象とし、その先はないかのごとく扱うのが普通のようなのである。資料がそのようにしか存在しないのであるから当然すぎる帰結ではある。その挙句、将来（未来）のことに言及するのは占い以外の何ものでもないと思避することになることもある。

日本の国語を英語や仏語などと代えるべきだという主張や、漢字の制限、仮名遣い、送り仮名、ローマ字使用の問題など言語政策（国語政策）に関わることは、将来のことに焦点を当てた事柄だと言える。しかし、国語を代える云々は論外として、漢字・仮名・ローマ字等、書記手段に関係したことであって、言わば二次的なものである。音声言語を対象とした議論はあまりなされない。中身の吟味をせずに容器のことだけを問題にしているように思えてならない。もちろん、容器も大事な要素ではあるが、あくまでも二次的なものであることには変わりはない。

日本語を将来このように変えたいという大それた意思はもってないし、また、占いをしようという考えもないが、日本語は将来このようになってほしいという希望はある。特に外国語としての日本語を教える立場にある者としては、そうである。

どのようになってほしいのか。一言で言えば、主に形態上の「簡潔化」である。何をさして簡潔化と言うか。簡単に類推のきくこと。誤解を恐れずに言うと、幼児でも類推可能な形態ということである。付け加えれば、異形態が2つも3つもあるという事態がなくなってほしいということである。その具体例についていささか述べようとするものである。

明治時代以降「標準語」という名で、「日本共通語」的なものが成立してきたように、「世界共通語」的な日本語をめざすのであれば、簡潔化は必須の条件であろう。そして、その日本語は、外国人用の日本語などというものではなく、日本人もこれを日常的に使用することを前提とする。今すぐとは言わず、「21世紀の日本語」はこうあってほしいとする一案である。

## 1. 助数詞の整理

異形態が2つも3つもあって煩雑なものの最たるものとして「助数詞」がある。

まず、よく例として出される「一本」をとりあげてみよう。「ポン、ボン、ホン」という3つの異形態が存する。促音の後では「ポン」、撥音の後では「ボン」、その他は「ホン」という説明がなされるが、妥当か。この説明は「4本」で破綻する。説明に一貫性を持たせようと「ヨンボン」だと主張する立場もあろうし、「ヨンホン」は例外的で、「ヨン」という形態により規定されているとする説明の仕方もあろう。しかし、いずれにしてもためにする説明の感は拭えない。その前がなぜ促音なり撥音なりになるかという疑問に答えられないからである。「ポン」の前は促音、「ボン」の前は撥音などという説明をするのであろうか。循環論法でしかない。

それで、少し飛躍するが、「ホン」ひとつに統一されないものか。「いちほん、にほん、さんほん、……」などと。現に、次のような例もある。山陽本線の駅名のひとつに「八本松」というのがある。これのひらがな表示は「はっぽんまつ」ではなく、「はちほんまつ」となっている。固有名詞だから例外だとして片付けてしまうには惜しい例である。

「一本」が「一本」だけになるとよいとするのに関連して想起される事柄がある。幼稚園や小学校低学年などで日付を教えるのに、「一にち」だけになっている例がある。「いちにち、ににち、さんにち、……」と。「ついたち、ふつか、みっか、……」を正しいとする感覚からは受け入れがたい方便ではあるが、日本人の幼児・児童のみならず、外国人にとっても、このほうがわかりやすかろう。簡潔だからである。

ところで、日本語の助数詞は煩雑すぎていけないから、何でも「ひとつ、ふたつ、……」で数えるようにすればよいという人がいる。発想はよいのであるが徹底してないきらいがある。このように数えるのは「とお」までで、そのあとは「じゅういち、じゅうに、……」のようにするというからである。それなら、初めから「いち、に、さん、……」と漢数字だけにしたほうがすっきりするし、一貫性がある。もともとの日本語を捨ててしまうのは惜しいという気持ちの現われかもしれないが、もともとの日本語というのがあるのか疑問なしとしない。あったとして、「ひとつ、ふたつ、……」がそれに含まれるのかどうなのか。

何でも「いち、に、さん、……」ですむことになれば、前述の「ホン」のような問題も解消される。助数詞も消える。

## 2. 動詞の形態変化

古典語から現代語へ移行してくる過程において<sup>(1)</sup>「ラ変の四段化」「二段の一段化」

「ナ変の四段化」「四段の五段化」などが起こった。これがさらに「変化」する（移り変わる）とすると、以下に述べることもあながち的外れではないと思われる。

＜動詞変化の単一化＞

（現代）日本語の動詞には「五段活用」型と「一段活用」型とがある（もちろん「変格」も）。ところが、これがなかなか厄介な代物であって、「着る－切る」「変える－帰る」などのペアを作ったりして、どちらに属するかをいちいち覚えなければならぬ。国文法臭があるからと「五段」「一段」の呼び名を使わず、「Ⅰ類・Ⅱ類」「読む・書くグループ、起きる・食べるグループ」などと言ってみたとところで、わかりやすくなったり覚えやすくなったりするものではない。新しいことばに出会った時に（それが「動詞」であることがわかったとして）簡単に類推がきくように、どちらかに統一されないものだろうか。

「五段」に統一されたとしたらどのようなになるだろうか。「読む」と「食べる」とで考えてみる（「活用形」などというものを考えているわけではない。論を進める上で有効だと考えられる代表的な形を示すだけである）。

表 1

読む	<sup>(2)</sup> jom-u	食べる	taber-u
読まない	jom-anai	食べらない	taber-anai
読みたい	jom-itai	食べりたい	taber-itai
読め	jom-e	食べれ	taber-e
読もう	jom-oo	食べろう	taber-oo
読んで	joN-de	<sup>(3)</sup> 食べて	tabeq-te
読んだ	joN-da	<sup>(3)</sup> 食べた	tabeq-ta

つまり、「食べる・起きる」の類は全部「売る・切る・乗る・降る」などと同じように変化するようになれば類推もたやすくなる。

ただ、「する」「くる」は依然例外として残るかもしれないが、「しる」「きる」である可能性が高い。すでに若年層の間では「これからどうする？」「いようになれば」「あいつ、きないよ」などという言い方が一般化しているからである。先の例にならえば、

表 2

しる	きる
しない	きない
したい	きたい
しれ	きれ
しろ	きろ
して	きて
した	きた

などとなろうか。

そして、「知る」「着る」との区別はアクセントによることになるか。たとえば、次のように。

知る                  着る  
 為る                  来る

いや、いっそのこと、「為(し)らない」「来(き)らない」のようになってくれたほうがすっきりするのもかもしれない。

ところで、可能表現として「起きれる、見れる、食べれる」などという言い方が一般化していると言えるが、これは次のような類推の結果と考えられる。

表 3

{ 読む	jom-u	⇒	{ 食べる	taber-u
{ 読める	jom-eru		{ 食べれる	taber-eru
{ 書く	kak-u		{ 起きる	okir-u
{ 書ける	kak-eru		{ 起きれる	okir-eru
{ 乗る	nor-u			
{ 乗れる	nor-eru			
{ 売る	ur-u			
{ 売れる	ur-eru			

(ついでに言えば、「受身」「尊敬」は「(ら)れる(-areru)」のみである。jom-areru, taber-areru)

このことからすれば、前述の「一段の五段化」もあながち突飛な発想とは言えない。また、現に方言によってはそのようになっているものもある。<sup>(4)</sup> 沖縄語がその例である。以下を参照(アクセント省略)。

表 4

ʔukijuN	起きる	ʔukiraN	起きない
kakijuN	掛ける	kakiraN	掛けない
ʔutijuN	落ちる	ʔutiraN	落ちない
misijuN	見せる	misiraN	見せない
jamijuN	止める	jamiraN	止めない
kurijuN	暮れる	kuriraN	暮れない

上例の否定の形は、音韻的にそれぞれ「起きらぬ、掛けらぬ、落ちらぬ、見せらぬ、止めらぬ、暮れらぬ」と対応すると考えられる。前述した「食べらない」参照。「—ない」と「—ぬ」との違いはあるものの軌を一にするとみなすことができよう。

沖縄語の場合、確かに、「一段の五段化」傾向を見せてはいるが、「一段」的要素も残している。「ての形」「たの形」にそれが現われる。先の語例で示す。

表 5

ʔukiti	起きて	ʔukitaN	起きた
kakiti	掛けて	kakitaN	掛けた
ʔutiti	落ちて	ʔutitaN	落ちた
misiti	見せて	misitaN	見せた
jamiti	止めて	jamitaN	止めた
kuriti	暮れて	kuritaN	暮れた

これらからすると、前記(表1)「食べて、食べた」は類推のしすぎであって「食べて、食べた」のまま移行するのかもしれない。

「五段」と「一段」との関わりに示唆を与える例を幼児(2歳半)のことばの中から記録しているので、次に示す。

- a. 降りらして。
- b. 出しようか。

それぞれ「降ろして」「出そうか」の意である。

これらは次のような類推の結果導き出されたものであろう。

飲む	—	飲まして	}	⇒	降りる	—	降りらして
nom-u		nom-asite			orir-u		orir-asite
取る	—	取らして					
tor-u		tor-asite					

<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">食べて</td> <td style="padding-right: 10px;">—</td> <td>食べよう</td> <td rowspan="2" style="font-size: 3em; vertical-align: middle; padding: 0 10px;">}</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: middle;">⇒</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">出して</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">—</td> <td rowspan="2">出しよう</td> </tr> <tr> <td>tabe-te</td> <td></td> <td>tabe-joo</td> <td>dasi-te</td> <td>dasi-joo</td> </tr> <tr> <td colspan="4" style="padding-top: 10px;"> <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">見て</td> <td style="padding-right: 10px;">—</td> <td>見よう</td> <td rowspan="2" style="font-size: 3em; vertical-align: middle; padding: 0 10px;">}</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: middle;">⇒</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">出して</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">—</td> <td rowspan="2">出しよう</td> </tr> <tr> <td>mi-te</td> <td></td> <td>mi-joo</td> <td>dasi-te</td> <td>dasi-joo</td> </tr> </table> </td> <td colspan="3"></td> </tr> </table>	食べて	—	食べよう	}	⇒	出して	—	出しよう	tabe-te		tabe-joo	dasi-te	dasi-joo	<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">見て</td> <td style="padding-right: 10px;">—</td> <td>見よう</td> <td rowspan="2" style="font-size: 3em; vertical-align: middle; padding: 0 10px;">}</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: middle;">⇒</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">出して</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">—</td> <td rowspan="2">出しよう</td> </tr> <tr> <td>mi-te</td> <td></td> <td>mi-joo</td> <td>dasi-te</td> <td>dasi-joo</td> </tr> </table>				見て	—	見よう	}	⇒	出して	—	出しよう	mi-te		mi-joo	dasi-te	dasi-joo			
食べて	—	食べよう	}						⇒	出して	—	出しよう																					
tabe-te		tabe-joo		dasi-te	dasi-joo																												
<table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">見て</td> <td style="padding-right: 10px;">—</td> <td>見よう</td> <td rowspan="2" style="font-size: 3em; vertical-align: middle; padding: 0 10px;">}</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: middle;">⇒</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">出して</td> <td rowspan="2" style="padding-right: 10px;">—</td> <td rowspan="2">出しよう</td> </tr> <tr> <td>mi-te</td> <td></td> <td>mi-joo</td> <td>dasi-te</td> <td>dasi-joo</td> </tr> </table>				見て	—	見よう	}	⇒	出して	—	出しよう	mi-te		mi-joo	dasi-te	dasi-joo																	
見て	—	見よう	}	⇒	出して	—						出しよう																					
mi-te		mi-joo					dasi-te	dasi-joo																									

沖縄語の例（「ラ行五段化」と言われたりする）と、この幼児の類推が将来の日本語の動詞の姿を示すものとすれば、表1の「食べる」は次のようになるだろう。

食べる、食べらない、食べりたい、食べれ、食べよう、食べて、食べた  
「食べりたい」「食べれ」ともに沖縄語からの類推である。

ʔukiibusaN（起きたい）

misiibusaN（見せたい）

jamiibusaN（止めたい）

ʔukiri（起きろ）

misiri（見せろ）

jamiri（止めろ）

音韻的に、／ʔukii-／は「おきり」、／misii-／は「みせり」、／jami-／は「やめり」に対応し、／ʔukiri／／misiri／／jamiri／はそれぞれ「おきれ」「みせれ」「やめれ」に対応する。

「一段の五段化」が進めば大分簡潔になるが、それでも依然として「五十音図」の影を引きずることになることは否めない。それからの脱却と「一段」からの反作用があると期待され（?!）、「五段」にも変化が生じよう。さらなる変化「五段の一段化」が起こってほしいものである。

その際の変化の可能性の高いものとして次の2方向が考えられるか。「読む、書く」の形になるか、「読みる、書きる」のようにいくか。「起きて、起きた」などからの類推から「読みて、読みた」「書いて、書きた」（先祖返り!?)の出現は容易であり、この線で行けば「読みる、書きる」のほうが実現性が高いと言えようか。

いまひとつ考えられるものがある。「読める、書ける」の形である。「行けない」「待てれない」のような言い方が、若年層の間ではかなり広く行われるようになったと観察されるからである。しかし、この「読める」「書ける」の形は、「読みられる（受身）、読みれる（可能）」、「書きられる（受身）、書きれる（可能）」のような形に吸収されてしまうのではないかと考えられる。

かくて、「五段」と「一段」との融和が起これば、将来の日本語の動詞は次のような姿をとることになるだろう。

起きる、起きらない、起きりたい、起きれ、起きるな、起きよう、起きて、起きた

食べる, 食べらない, 食べりたい, 食べれ, 食べるな, 食べよう, 食べて, 食べた, …  
書きる, 書きらない, 書きりたい, 書きれ, 書きるな, 書きよう, 書いて, 書きた, …  
泳ぎる, 泳ぎらない, 泳ぎりたい, 泳ぎれ, 泳ぎるな, 泳ぎよう, 泳ぎて, 泳ぎた, …  
話する, 話しらない, 話しりたい, 話しれ, 話するな, 話しよう, 話して, 話した, …  
待ちる, 待ちらない, 待ちりたい, 待ちれ, 待ちるな, 待ちよう, 待ちて, 待ちた, …  
死にる, 死にらない, 死にりたい, 死にれ, 死にるな, 死によう, 死にて, 死にた, …  
遊びる, 遊びらない, 遊びりたい, 遊びれ, 遊びるな, 遊びよう, 遊びて, 遊びた, …  
読みる, 読みらない, 読みりたい, 読みれ, 読みるな, 読みよう, 読みて, 読みた, …  
乗る, 乗りらない, 乗りたい, 乗りれ, 乗るな, 乗りよう, 乗りて, 乗りた, …  
歌いる, 歌いらない, 歌いりたい, 歌いれ, 歌いるな, 歌いよう, 歌いて, 歌いた, …  
為る, 為らない, 為りたい, 為れ, 為るな, 為よう, 為て, 為た, ………  
来る, 来らない, 来りたい, 来れ, 来るな, 来よう, 来て, 来た, ………

これで「辞書の形」は全て「\_る」で終わり、簡潔なものとなる。さらなる変化を望むとすれば、「\_iru」で終わるものが多くなることから、「食べる→食べる」  
「掛ける→掛きる」「見せる→見しる」のような移行である。そうなると、所謂「自他の区別」が失われる可能性が出てくる。失われてもよいが、残る(残す)方向で考えるとすると、たとえば、

開く → あきる

開ける → あきらしる

か、助詞により

戸が あきる

戸を あきる

のように区別することになるが(この場合、「戸がは あきる」「戸をは あきる」のように、「が」「を」と「は」との共存も容認される), どちらでもよからう。

### 3. 形容詞と形容動詞の単一化

「形容動詞」を認めない立場があり、それはそれでよいのであるが、実際の「きれいだ、きれいで、きれいな」「じょうぶだ、じょうぶで、じょうぶな」「静かだ、静かで、静かな」などといった形を認めないわけにはいくまい。これらを如何に分析するかは別問題であって、日本語を習得し運用できるようになるためにはさほど役に立たない。言語によっては同じグループに属するはずのものが、日本語では別のグループに属する(たとえば「美しい」と「きれいだ」というところからくる煩雑さ、そ

してそこから発する混乱をいかに解消するかが問題なのである。

いっそのこと「形容動詞」も形態的に「形容詞」の仲間入りをしてくれないものか（その数もそれほど多くないし）。次に述べる事柄がその後押しをしてくれそうである。

① 実際の言語生活では、「きれいだ」よりは「きれい」のほうが頻出するのではないか。また、「きれい花」「きれかった」「きれくて」「きれくなる」などもさほど抵抗を与えないのではないか。特に西部方言、琉球方言の大多数の話者にはそうであろう。

② <sup>(6)</sup>方言によっては、形容動詞的なものが形容詞のかたちをとっているものがある。

例. 面倒い(メンドイ)、大儀い(タイギイ)

③ 語によっては、形容詞的にも形容動詞的にもはたらくものがある。

例. { かたちが 同じに なる。  
      { かたちを 同じに する。  
      { \*意見が 同じく なる。  
      { 意見を 同じく する。

「同じくする」はよいが、「同じくなる」は容認可能とは言えまい。

「同じい」は「『同じだ』の老人語」と言われるから<sup>(6)</sup>、「形容動詞→形容詞」移行の過渡的現象と捉えることには難があらうが、橋渡しの存在とすることは可能であろう。

④ 「\_ようだ」の口語の形として現れる「\_みたいだ」は、最近は「\_みたく、\_みたい」のように使われることが多い。

形容詞と形容動詞との単一化が起これば、次のようになり、習得しやすくなるろう。

赤い、赤く、赤くて、赤くない、赤かった、赤いです、……

きれい、きれく、きれくて、きれくない、きれかった、きれいです、……

静かい、静かく、静かくて、静かくない、静かかった、静かいです、……

面倒い、面倒く、面倒くて、面倒くない、面倒かった、面倒いです、……

#### 4. 助動詞の変化

「助動詞」の存在を積極的に否定する立場もあったりして<sup>(7)</sup>、その認定には慎重を要するが、今回の目的は認定問題にはないので、便宜上、慣習的に「助動詞」とされているものについて述べる。

「無変化」の助動詞もあるが、「(ら)れる、(さ)せる」「たい、らしい」「そうだ、ようだ」のように「動詞型」「形容詞型」「形容動詞型」のものがそのほとんどであ



るから、それぞれの変化に準じることとなる。いちいち述べるまでもないが、念のために例をいくつか示しておこう。

「読む」「食べる(食びる)」に続いた形で示す。

<しる(←(さ)せる)>

読みらしる、読みらしらない、読みらしりたい、読みらしれ、読みらしるな、読みらしよう、読みらしして、読みらした、……

食べらしる、食べらしらない、食べらしりたい、食べらしれ、食べらしるな、食べらしよう、食べらしして、食べらした、……

<りる(←(ら)れる)>

読みらりる、読みらりらない、読みらりりたい、読みらりれ、読みらりるな、読みらりよう、読みらりて、読みらりた、……

食べらりる、食べらりらない、食べらりりたい、食べらりれ、食べらりるな、食べらりよう、食べらりて、食べらりた、……

<そうい(←そくだ)>

読みりそうい、読みりそうく、読みりそうくて、読みりそうくない、読みりそうかった、読みりそういです、……

食べりそうい、食べりそうく、食べりそうくて、食べりそうくない、食べりそうかった、食べりそういです、……

読みるそうい、読みるそうく、読みるそうくて、読みるそうくない、読みるそうかった、読みるそういです、……

食べるそうい、食べるそうく、食べるそうくて、食べるそうくない、食べるそうかった、食べるそういです、……

## 5. 動詞と形容詞との融和

「ちがかった」という例がある。「違い」を形容詞のように捉え、「ちがく、ちがかった」のように類推した結果出てきたものと思われる。まだまだ認知される形ではなかろうが、動詞と形容詞との垣根が取り払えないものではないことを示すものと解したい。

言語の類型上日本語とほとんど同じ様相を呈する朝鮮語は、大筋において形態の上では動詞と形容詞とを区別しない。それで何の不都合もないばかりでなく、それが習得上有利に作用すると思えるところがある。日本語も同じようになる可能性が零ではなかろうし、むしろそのようになることを望むものである。

動詞と形容詞との垣根が取れるとすれば、どのように実現するであろうか。希望的

観測ならぬ夢物語に終わるかもしれないが、述べてみよう。

動詞と形容詞との形態上の融和が起これば、その前に、動詞の「五段」「一段」の単一化(融和)のあと「食べらない、食べりたい」などが「食べない、食べたい」などへと先祖返りする必要がある(←「たべて」「たべた」から)。その類推で「読まない、読みたい」などとなっているとする。また安易な方法であるが、次のような類推がはたらいたとしよう。

食べて-食べる }  
読みて-読みる } → あかくて-あかくる

あかくる、あかくない、あかくよう、あかくて、あかくた、……

きれくる、きれくない、きれくよう、きれくて、きれくた、……

たべる、たべない、たべたい、たべれ、たべるな、たべよう、たべて、たべた、…

よみる、よみない、よみたい、よみれ、よみるな、よみよう、よみて、よみた、…

などとなる。

助動詞にも波及する。

よみしる、よみしなくなる、よみしたくる、よみしれ、よみしるな、よみしよう、よみして、よみした、……

たべしる、たべしなくなる、たべしたくる、たべしれ、たべしるな、たべしよう、たべして、たべした、……

よみりる、よみりなくなる、よみりたくる、よみりれ、よみりるな、よみりよう、よみりて、よみりた、……

たべりる、たべりなくなる、たべりたくる、たべりれ、たべりるな、たべりよう、たべりて、たべりた、……

など。

## 6. 「です」と「ます」

「ないです」と「ありません」, 「うれしくなかったです」と「うれしくありませんでした」などのように二様の言い方がある。二様・三様の言い方がある場合、似てはいるが違う点がある(意味が違う)とするのが一般的である。これらの例も「意味」が違うものではあろう。ていねい度の違いであるとか、「形容詞+です」と「動詞の連用形+ません」との違いとかいうことになろうか。後者はためにする説明であって詰まるところ「違い」は「ていねいさ」だけではないかと思われる。「ないです」よりは「ありません」のほうがていねいであるが、この違いにいかほどの意義を見出すことができるか。どちらか一方だけになってもさして不都合なことは起こるまい。す

っきりして却って都合がよいのかもしれない。結論的に言えば、「です」のほうがよい。名詞にも続けるという利点もあるからである。

「です」を取りたい理由をいくらか述べよう。

ア. そういうこともあるですか。

イ. きのうも行ったです。

このような例は、人によっては抵抗を覚えるだろうが、広がりつつある言い方である。考えてみれば、

そういうこともあるでしょうか。

きのうも行ったでしょう。

という言い方は容認されるのに、「でしよ(う)」と「活用形」の違うだけの「です」が同じ語に続くことが許されないというのが不自然である。(「です」と「でしよ(う)」とを全く別のものとして扱うのでない限り)「う」の影響などという説明は成り立たない。なぜなら、「見られよう」はよいが「見られる」はいけないとか、「話したかろう」は可能だが「話したい」はそうではないなどと言えないからである。

また、「うれしかったです」は認められるのに、「行ったです」が認められないというのもおかしい。同じ「た」に「です」が続いているのであるから、「た」の前の部分が「形容詞」であるか「動詞」であるかで左右されるのはおかしい。

歴史的に見れば、「うれしいです、早いです」などのように「形容詞+です」が容認されるようになって日が浅いのであって、今なお「\_いです」の形を認めず「\_うございます」だけを主張する人もいるくらいである。「あるです」「行ったです」も同じ道を歩むであろう。

動詞と形容詞との融和が起こったとする段階で考えれば、「ます」の存続もあってよい。しかし、前述のように「名詞」(との接続)との統一性の上からも「です」がよい。そして、たとえば「食べるです」と「食べるでしょう」とは違い、後者は「食べようです」でカバーすることは難があると考えられるので、「です」と「でしょう」とを認める。「でした」は、「\_たです」で代われるから、不要である。(「でしる」「でししょう」への変化は、あってもよいが、なくてもよい。)

以上述べてきたことは、あくまでも原則的一案であって、可能性のひとつを示しただけにすぎない。また、いままでの形を排斥するものではないし、将来的には、さらに、自然に「変化」することも前提とする。

そうなりたらよくなると思います。<sup>(8)</sup>

(注)

- (1) 以下, 便宜上, 学校文法用語を使って述べていくこととする。
- (2) 音韻表記。以下同じ。
- (3) 「切る kir-u, 切って kiq-te, 切った kiq-ta」などからの類推。
- (4) 首里方言を中心とするものをさしている。
- (5) たとえば, 広島方言。
- (6) 『新明解 国語辞典 第二版』
- (7) たとえば, 吉川武時「“助動詞”のない文法」『日本語学校論集』15号, 1988年, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- (8) (←そうになったらよいと思います。)